

統合失調症者の家族交流会の集団精神療法的考察

立命館大学応用人間科学研究科
対人援助学領域
障害・行動分析クラスター
伊藤 栄見子

精神医療は脱入院化に伴い、家族に対する心理教育が各地で実施されており、心理教育の前後に感情表出を見る研究はあるが、家族教室の経過に沿って、参加家族の感情を見る研究はなかった。筆者の勤務する X 病院には、これまで家族の交流、学習の場がなかったために、家族支援の必要性を感じ家族交流会が発足した。本研究は、家族交流会における参加家族の経過の中での、感情表出や想いや行動の変化に焦点を絞り、参加者同士の相互交流の体験がもたらす効果について、感情表出や集団精神療法の観点から検討した。

家族交流会は、X 病院で毎月 1 回、統合失調症者の家族 12 名を対象に 1 クール 10 回実施し、各回 7 名から 10 名が参加した。自己紹介や良かったこと、困っていることの話合いと講義を行った。そして家族交流会での参加者の会話内容から感情表出の研究を参考にして、「批判・不満」、「肯定的言辞・暖かみ」、「情緒的巻き込まれ」を抽出した。さらに家族交流会終了後、参加家族にインタビューを実施して、参加動機、参加した感想、行動・考え方の変化、参考になった意見・影響をうけたことについて結果をまとめた。

批判や不満は、増減があったが全体的に減少した。治療、服薬の拒否や患者の不穏な行動、生活技能の低下、対人関係の障害に関することやその対応に関して批判や不満が多かった。肯定的言辞や暖かみは、全体的に増加し、具体的に良かったことを話せるようになり患者や自己の評価を高めていくことが出来ていた。情緒的巻き込まれに関する発言や態度は減少したが、特定の参加者の子供を対象化できていない面が話されていた。家族は家族交流会に参加するまでは、感情や体験を共有する他者が存在せず、批判や不満を表現できる場所が少なかった。そのため病院が家族交流会を主催したこと自体が心理的サポートになった。参加後は、様々な感情や考えを表現し、具体的な生活場面や家族関係について安心して語る事が出来るようになり、感情の共有や孤立感の減少、普遍的体験をしていた。また家族交流会の中で受容され理解される体験を重ねながら、仲間意識の芽生えや愛他的な面が生まれ、参加者の所属感や凝集性が出来ていった。また家族同士の相互交流の中で、自他を比較することにより、優越感が生まれ自己愛が満たされたり、他を見習う学習行動が生まれたり、自分が問題として認識していなかったことでも考え直すきっかけが生まれていた。さらに観察効果による自己の客観視や自己肯定感を高めることが出来ていた。

1 クールの家族交流会では、まだ理解しようとする気持ちが行動変容にうまく結びつかないこともあったが、患者の病気や気持ちを理解しながら関わる姿勢に変化しつつある。また患者との相互関係の中で、批判や不満を感じることもあっても肯定的な側面をみる事が増えた。